小学校学級経営の一環としての教室掲示に関する事例研究

―教室掲示の基準「掲示計画」作成状況を中心として―

菊地　春花・丸山　剛史

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要　第９号　別刷

２０２２年８月３１日

小学校学級経営の一環としての教室掲示に関する事例研究†
―教室掲示の基準「掲示計画」作成状況を中心として―

菊地　春花*・丸山　剛史**
宇都宮大学教育学部卒業生*
宇都宮大学共同教育学部**

本報告は、小学校学級経営の一環としての教室掲示に関する事例研究であり、T県公立小学校における教室掲示に関する基準の有無及び内容、教室掲示の事例を検討し、教室掲示の実状について若干の特徴を明らかにすることを目的とした。検討の結果、1）自治体レベルで教室掲示基準を設けているところもあるが、過半数が学校ごとに基準を設けており、「掲示計画」と呼ばれていることが少なくないこと、2）実際の教室掲示では、掲示物の掲示に際して、児童からの要望が反映されたり、係活動等を通して児童が工夫して掲示を行うなど、教室掲示、教室づくりへの子ども参加が認められること、等が明らかになった。

キーワード：掲示教育、学級経営、小学校、教育方法

1．研究の目的及び方法

本稿は、小学校学級経営に関する教育実践的研究の一環として教室における掲示（以下、教室掲示と略記する）のあり方を検討しようとするものである。近年、「ユニバーサルデザインの観点から教室前面には掲示物を貼らない」等、教室掲示のあり方が話題になっている。しかし、こうした教室掲示のあり方は、必ずしも十分に理論化が進められてきたとは思えない。例えば、『新教育学大事典』（第一法規、1990年）には「教室」、「教室環境」の項目は立てられていたが、教室掲示には言及されていなかった。わずかに「学級経営」の「学級における教室環境の経営」に関する諸問題の一つとして「展示・掲示をどうするか」について言及されるに止まっていた[1]。

『新版　現代学校教育大事典』（ぎょうせい、2002年）に至り、「掲示教育」の項目が立てられ、普通教室だけでなく特別教室や廊下をも含んだ学校内の掲示に関する概念整理がなされている[2]。

「掲示教育　［意義］　教室や校舎の壁面・空間を利用して、教材・資料等を計画的に掲示または展示する方法。（中略：引用者）掲示の教育的意義は次の点にある。①一定の主題について、関連資料を計画的に収集して掲出することにより、学習者の知的興味や関心を引きつける。②主題に関する内容を一定数の掲出資料にまとめることで、その基本・重点を提示できる。③教室や施設全体を学習環境として整え、学習者の学習意欲を刺激する。④掲出資料の収集、作成、レイアウトや掲出作業等を学習者が担当することにより、視覚に訴える表現方法を学習するとともに、学習者同士の協同活動をとおして社会性を高めることができる。」

教室掲示は、学級経営の一環をなすものであり以前から留意されてきたが、近年になり「掲示教育」として概念整理されるようになった。

こうした学級経営としての教室掲示に関して、筆者らは以前から関心をもっていたが、学校見学など

† Haruka KIKUCHI*, Tsuyoshi MARUYAMA**: Case Study on Educational Notices as Elementary School Classroom Management
Keywords: educational notice, classroom management, elementary school, educational method
* Utsunomiya University Faculty of Education Graduate
** Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University
（連絡先：marusan@cc.utsunomiya-u.ac.jp　著者2）

で学校・教室を訪問するなかで、学年・学校において教室掲示のあり方に関する基準を設定している学校、地域があることを知った。

こうした基準は、教育の水準を高める役割を果たすが、他方では教師の創意工夫を抑制する方向に機能してしまうことがあり、教室掲示基準の内容が問われるところであろう。

しかし、教室掲示に関する先行研究は教師自身の教室掲示に関する実践や試行の紹介が少なくなく、教室掲示に関する現状や動向、特に上記のような教室掲示の基準に関して主題的に論じた論考を見いだすことはできなかった。

そこで、本稿では、まずは事実を確認し、記録することから始めたい。そのため、T県内の公立小学校に限定し、1）教室掲示に関する基準の有無、2）基準がある場合には基準の内容を検討した。そのほか、3）教室掲示の実際に関する事例研究として5人の小学校教師へインタビューを行い、教室参観を行った。以下、調査結果の概要を記す。

2. T県内各自治体の教室掲示基準

T県内において各市町教育委員会に教室掲示に関する基準（明文化された規則・方針等）の有無についてアンケート調査を行った（2020年10月実施）。25地区のうち21地区（84%）から回答を得た。

アンケートでは「貴市町には学校の教室掲示のあり方について明文化された規則あるいは方針はありますか」と問うた。回答として「はい」を選択したのは1地区のみであった。

当該地区では「〇〇学びのスタンダード」と名付けられた文書に、「1　教室環境を整えよう」「2板書を考えよう」という2項目が掲げられ、「掲示板の活用」を強調しつつ、「前壁面の掲示物の整備」として前壁面、特に黒板上前面の掲示物を精選させようとしている。「側面や背面に貼ることが考えられる掲示物」も掲げられ、「校歌」「各種当番表」「各学期のめあて等」「各指導部の重点目標」「清掃分担表」「学習の約束」「各種お便り」が例示されていた。

他地区からの返信では、「教室掲示については、各学校ごとに（各学年ごとに）共通理解を図っているようです。」「各学校ごとに掲示等についての共通すべき事項が統一されていると思います。」「各学校に掲示教育の計画があり、工夫した教室掲示を行っています。」等の回答を得た。

そこで、他地区に関しては、各学校へ掲示計画について質問することとした。

3. T県内各学校の教室掲示基準（掲示計画）

上記1地区以外の市町に関しては、各市町の小学校にアンケート調査を行った（2020年12月実施）。学校選定に際しては、1）各学年複数学級設置されていること、2）学校設置年の古い学校、の2つを基準として対象校を選定した。1学年1学級の単級であれば基準は不要であろうし、設置年の古い学校ほど、過去の経験をもとに慣行が規則化されるように思われたからである。そして対象校に対して、趣旨説明文を郵送した後、電話にて校長あるいは副校長・教頭に教室掲示に関する基準の有無について質問した。教室掲示に関する基準がある場合には郵送用封筒を送付し、各学校の教室掲示基準を入手した。検討の結果、次のことが明らかになった。

（1）教室掲示の基準・方針に関する文書「掲示計画」

各学校の教室掲示基準は「掲示計画」と名付けられている場合が多い。該当校24校のうち15校（62.5%）が教室掲示基準を「掲示計画」といった名称で作成していた。各学校の教室掲示の基準に関する文書の名称は次のとおり。

「教室内掲示計画」「掲示教育指導計画」「掲示指導計画」「環境整備全体計画（掲示）」「環境美化計画（掲示関係）」「校内掲示計画」「教室環境の整備」「教室環境整備について」「教室内環境計画」「令和〇年度掲示計画」「令和〇年度教室掲示計画」「校舎内掲示計画一覧」「校内環境について」

掲示計画の内容は、後掲の表の通りである（表「教室掲示の一覧」参照）。掲示計画の記載内容は、頻出順に、学校教育目標が14校、時間割が13校、学級目標が8校、日課表、献立表、学年だより、係活動、学習コーナーが7校などの順となっている。

（2）最も詳細な教室掲示基準

今回収集した教室掲示基準のうち最も詳細に記されたものは、K町A小学校のものであり、A4判5ページにわたり記されている。

内容は、次の4つから構成されている。

「1　掲示計画目標（学校教育目標との関連）」

「2　掲示場所と分担及び内容」

「3　校内掲示についての留意点」

「教室掲示案」

「1」には「学校教育目標」と「掲示計画具体目標」との関係が示されている。「掲示計画具体目標」には、次の5つが掲げられている。

「1　学年目標・学級目標・学習の約束・学習内容を喚起させるものを掲示し、児童の学習意欲を高めることができるようにする。」

「2　委員会活動・係活動・クラブ活動などで作成した作品を掲示し、児童の自主性を育てることができるようにする。」

「3　児童会活動・各行事などの様子が分かるものを掲示し、児童の豊かな心情を育てることができるようにする。」

「4 「総合的な学習の時間」を踏まえて、児童の思いを表現できるようにする。」

「5　自分たちの地域・学校・クラスをきれいにし大切にしたいという心情を育てることができるようにする。」

このように、掲示教育の教育目標が示されるだけでなく、下記のように「3」には「留意点」が記され、教師が掲示、掲示物を貼り替える際に留意すべき点についても明記されている（省略した箇所には学校教育目標が付記されている）。「留意点」は普通教室だけでなく、特別教室や廊下等も含まれている。

「3　校内掲示についての留意点

(1) 全児童のものを掲示または陳列する。(略)

①自分の作品が掲示されていることにより、自分の教室という意識をもつことができるようにする。

②作品を掲示するときには、教室の内外に綺麗に掲示しておくように心掛ける。

(2) 学習内容を高める掲示にする。(略)

①一単元（一題材）ごとに学習内容をまとめて、復習や次の学習内容を喚起させるようにする。

②児童作品には、児童に苦心したところや工夫したところ、上手にかけたところを書かせる。教師は、児童作品の特によくできているところを認め、励ますような文章で具体的に示すようにする。

(3) 児童の自主性を育てる（略）

①掲示活動はできるだけ児童に行わせる。教室を大切にしていくという思いをもたせるためにも、児童の自主性に任せたコーナーを設ける。

(4) 児童の豊かな心情を育てる。(略)

①児童の作文や読書感想文、新聞の切り抜きからの感想、グループで制作した作品、地域や我が家のニュースなど、工夫を凝らした作品を掲示する。

(5)「総合的な学習の時間」を踏まえて、児童や教師の思いを表現できる掲示を考える。(略)

(6) 教室掲示案を原則にしながらも、学級としての独自性を発揮するとともに学年との調和を考えて掲示する。(略)

(7) 一人一人を大切にした教室環境を工夫する。(略)

(8) 掲示板、掲示壁面以外の場所には、原則として掲示しない。

(9) 期間のあるポスターについては、その期間内のみの掲示とする。

(10) 定期的に送られてくるポスターについては、掲示する場所を固定し、随時更新していく。

(11) 特別教室等、随時変えることが必要でない箇所は、年一度確認し、補修が必要なところは補修する。また、2年以上同じ掲示の場合は、見直す。」

「教室掲示案」では、「ア　学校教育目標」「イ学級目標」「ウ　発表の仕方、ハンドサイン」、「エ児童に知らせたい掲示」、「オ　児童作品」、「カ　行事、学習予定」のように掲示物の種類が明記され、掲示する場所も定められていた。

掲示場所は、「ア」「イ」「ウ」は教室前面、「エ」「オ」は教室側面、「オ」「カ」は教室背面と指定されていた。ただし「エ、オ、カは、各学年、各学級に応じて工夫する」と工夫の余地も残されていた。

(3) 教室掲示基準非作成校：校長口頭による指示

教室掲示基準非作成校では、教室掲示のあり方は校長が口頭で指示している、という趣旨の回答を得た（2校）。

4. 5人の教師へのインタビューと教室参観：児童の教室掲示への参加と学習・学校生活への転化

事例研究として、5人の現職小学校教師にインタビューを行った。新型コロナウィルス感染拡大期であったため、いずれもウェブ会議システムZoomを用い、教室掲示を見せてもらいながらインタ

ビューを行った。可能な限り異なる市町となるよう、対象選定に留意した。インタビューの際は次の４点について質問した。①掲示の工夫、②子どもの参加、③子どもの反応、④学年による違い。インタビューの結果は次の通りである。

【事例1】Ｈ小学校Ｎ教諭（2021年1月7日）

①工夫している点は子どもたちが教室掲示に参加できるようにすることである。背面に係活動のコーナーを設けている。

②係活動のコーナーに自由に書くことができる場所を設けている。また、子どもたちから掲示の要望があれば応じている。

③係活動のコーナーは子どもたち自身で作っているところであり、友達の活動に興味をもつ子が多い。学習の振り返りについても掲示をしているが、学習内容の振り返りに関する掲示は授業内で確認し、子どもたちが学習の振り返りを行うきっかけとなっている（写真1参照）。自主学習ノートの掲示は手本にさせたい子どものノートを掲示している。自主学習の方法を知って他の児童が真似をすることもある。

④子どもたちが自由に使える場所が違う。低学年ほど少なく、学年が上がるに従い多くなっている。

写真１　教室壁面の掲示

【事例2】Ｍ小学校Ｓ教諭（2021年1月12日）

①側面に単元ごとに流れを残しておく。算数で公式を学習したときは学習した公式に関する掲示物を掲示しておく。授業の際に掲示を見ながら学習を振り返り、確認する。

②自分たちで描いた絵を貼る。

③学習した内容等を思い出しやすくなっている。学習意欲の喚起・向上につながっている。

④担任する学年にあわせてその都度考えている。1年生は校歌（音楽委員会の児童が作成したもの）を掲示している。

【事例3】Ｍ小学校Ｕ教諭（2021年1月13日）

①学習の流れやポイントが、子どもたちの目に触れることで自然に復習できるようにしている。行事等で撮った写真を掲示することにより、これまでの自分たちの頑張りを確かめ、学級の絆が深まるようにしている。学習の振り返りのために、年間を通して掲示するものはクリアフォルダーを活用している。

②係活動で「掲示係」や「かざり係」があり、子どもたちが季節に合わせた装飾を用意している。係からクラスの児童へ通知は、自由に行うことができるよう背面黒板にスペースを設けている（写真2参照）。

③休み時間に互いの作品を見たり、行事の思い出について話したりしている。

④低学年はイラストを多くして、視覚的にわかりやすくしている。高学年は自主的な活動を促すため、係からの通知等が掲示できるように自由に使えるスペースを設けている。

写真２　教室背面の掲示

【事例4】Ｃ小学校Ａ教諭（2021年1月14日）

①教室前面には可能な限り掲示物を貼らないようにしたい。成長を可視化できる掲示物を掲示したい。

②2年生は掲示の作業には参加していない。かざり係がかざりを掲示している。係は自分たち

で決めている。ホワイトボードに自由に書けるようにし、友達に発信したい気持ちを行動に移せる場となっている。自分たちでやりたいという気持ちをもつことにつながっている。

③自分たちで作ったものを貼るときには喜ぶ。個人ファイルに新しいものを入れたときはよく見ている。

【事例5】U小学校K教諭（2021年1月15日）

①個人のめあてのコーナーを設けている。学級目標を軸に、個人のめあてを考える。定期的に振り返りの時間を設け、新しいめあてを考える。振り返りではそれまでのめあてを自己評価し、達成していたらシールを貼る。達成していないめあては、新しいめあてに引き継ぎ、達成できるようにする。

②係活動のコーナーが充実するよう心がけている。係活動は子どもたちにとってクラスが楽しくなるよう、明るくなるように考え、係をつくるようにしている。係ごとにフォルダを設け、作ったポスター等を自由に入れられるようにしている。フォルダ周りのスペースには係が描いた絵やかざりを掲示している。子どもたちがやりたいことを考える係活動は、協力する雰囲気づくりや学びあいにつながっている。

③掲示に変化があったときはよく見ている。

④低学年は、イラストや飾りを掲示する。学校は楽しいところだと感じさせ、生活の仕方を分からせるために掲示し､安心できる教室をつくる。中学年は、自分たちでやりたいことを実行できる掲示環境をつくる。自由に掲示できるスペースを設けることで自分たちで経営することの面白さや楽しさを学ばせる。

【小括】

教師の意識として共通していたのは、教室掲示への子ども参加である。そのために、係活動の掲示が利用される傾向にある。係ごとに自由に発信できるコーナーを設けていたり、子どもたちが作成したものを掲示できるようにしていた。係を子どもたち自身で考えさせている場合もあった。子どもたちは掲示したい掲示物があると担任教師に相談し、教師がそれを認め掲示していることもあった。子どもたちが自分たちのやりたいことを実現できる場を設けることにより、子どもの自主性・自発性の育成につながることがある。

係活動以外にも、学級目標掲示への子ども参加があった。学級目標を子どもたちに決めさせ、一人ひとりの手形や似顔絵を目標の周りに掲示し貼っていることもあった。

また、学習の振り返りを行うために算数科の公式等を掲示することもあった。授業の流れに即して掲示しておくことで、授業時の振り返りがスムーズに行えるということであった。

5. まとめ

以上のように検討してきて、次のことは指摘しておきたい。

第一に、教室掲示のあり方は「掲示計画」といった名称で基準となる文書が学校ごとに作成されている場合が多いということである。なかには自治体レベルで統一的な基準を用意しているところもあった。紙数を使い、詳細に記した学校も存在したが、各学年・学級の工夫も考慮されていた。教室掲示基準非作成校では校長が口頭により説明を行っていた。

第二に、教室掲示の実際に関して、掲示物としてしばしば掲示されるものとして多いのは学校教育目標、時間割、学級目標、日課表、献立表、等々であった。学校教育目標が最も多いことは掲示物でも学校経営が意識されていることの反映と思われ、学級経営と学校経営の関係を認識した。

第三に、教室掲示への子ども参加が考慮されているということである。具体的には、係活動の掲示、子どもたちの提案で貼られる掲示があることである。学校教育目標、学級目標、時間割、種々の通信はかなりの学校において共通的に貼られていたが、なかには係活動の一環として児童が掲示物を掲示する学級もあった。子どもの教室づくりへの参加として着目される。子どもたちが教師に提案・交渉してくるケースもあり、こうした子どもの自主性・自発性が学習活動に転化していくとも聞いた。小学校低学年の学級目標掲示の作成にさえ、子どもたちの手が加わっている場合もあった。改めて、教室掲示の教育的意義の大きさを考えさせられた。

付記と謝辞：本稿は、筆頭著者の卒業論文最終発表会（2021年2月）要旨集収録要旨に第二著者が本

人の了解を得て加筆・修正を行った。文責は第二著者にある。卒論要旨には、日本における掲示教育の歴史に関する記述もあったが、紙幅の都合により今回は削除した。また、新型コロナ感染が拡大していた時期に、慣れないウェブ会議システムを用いてインタビューと教室参観に応じてくださった先生方に心から御礼を申し上げたい。

参考文献

1「学級経営」『新教育学大事典　第1巻』第一法規出版、1990年、467-172ページ、執筆者は児島邦宏。
2「掲示教育」『新版　現代学校教育大事典　第2巻』ぎょうせい、2002年、492-493ページ、執筆者は高桑康雄。

令和4年4月1日 受理

表　教室掲示の一覧

No.	掲示物の種類	A校	B校	C校	D校	E校	F校	G校	H校	I校	J校	K校	L校	M校	N校	O校	校数
1	学校教育目標	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	14
2	時間割	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○		13
3	学級目標				○		○	○	○	○		○	○	○		○	9
4	日課表					○	○	○	○	○		○		○			7
5	献立表	○	○		○		○		○		○	○					7
6	学年だより	○	○	○	○			○			○				○		7
7	係活動	○	○	○	○	○	○	○									7
8	学習コーナー	○	○	○	○	○	○		○								7
9	学年目標		○	○		○			○	○			○				6
10	給食当番表	○		○	○	○	○					○					6
11	保健だより		○	○	○			○			○				○		6
12	校歌		○	○		○	○					○	○				6
13	声の大きさ		○	○		○		○	○		○						6
14	個人のめあて	○	○			○	○	○		○							6
15	作品掲示	○	○		○	○		○		○							6
16	今週・今月の目標	○	○	○			○								○		5
17	姿勢	○	○	○					○					○			5
18	発表の仕方・ハンドサイン				○		○		○		○		○				5
19	□□□の子どもたちへの教え			○						○			○	○		○	5
20	生活目標		○		○				○			○					4
21	話し合いの約束		○			○		○	○								4
22	清掃分担表・当番表			○	○	○	○										4
23	鉛筆の持ち方	○	○	○													3
24	行事予定	○	○				○										3
25	学習目標		○						○								2
26	給食だより		○		○												2
27	学校だより		○		○												2
28	詩・ことわざ・慣用句	○			○												2
29	交通安全誓いの言葉						○						○				2
30	避難経路	○								○							2
31	歴史年表	○						○									2
32	給食の片付け方			○													1
33	図書だより							○									1
34	学校のきまり				○												1
35	聞き方			○													1
36	話し方			○													1
37	学習予定	○															1
38	クラスの組織図	○															1
39	朝の会・帰りの会			○													1
40	遊びの約束				○												1
41	道徳							○									1
42	テスト結果	○															1
43	３あい運動	○															1
44	ABC/R運動	○															1
45	地図							○									1
46	□□市児童憲章									○							1
47	JRC						○										1
48	□□町こども憲章										○						1
49	行事の振り返り					○											1
50	読書の記録					○											1
51	学習記録					○											1
52	良い子の像			○													1
	校数	21	21	20	18	17	16	15	13	10	8	8	7	6	4	3	

注．地名等は□で表記した。

Case Study on Educational Notices as Elementary School Classroom Management

Haruka KIKUCHI, Tsuyoshi MARUYAMA